

---

# ハヤテのごとく！ヒナギクが宇宙人!?やっつけ地球征服！

桂 ヒナギク

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ハヤテのごとく！ヒナギクが宇宙人！？やっつけ地球征服！

### 【Nコード】

N8275D

### 【作者名】

桂 ヒナギク

### 【あらすじ】

惑星メタリックから来たメタリック星人に体に乗っ取られたヒナギクは、地球を征服しようと企み・・・

## ++プロローグ++（前書き）

思い付きのネタです。

飽きて放置するかも知れませんが、頑張りたいと思います。  
て言うか、地球征服って規模でけえなあ。

## ++プロローグ++

地上から約1、000Km離れた場所に、球体形の宇宙船は在った。

その船には、全身がメタルで出来た地球外生物が乗っている。そいつは地球を目前にすると、ニヤリと笑みを浮かべた。

「終わったー」

時計塔の最上階にある生徒会室で、桂かつら 雛菊はそう口にした。机の上には山積みになされた手紙の入った封筒。彼女は今まで、此処で手紙を書いていたのだ。

これらは全て、ヒナギクに宛てられたラブレターの返事である。「さてと」

と席を立った刹那、時計塔の前に宇宙船が墜落した。

ヒナギクは驚き、何かかと思いいエレベーターで地上に下りた。

「な、何よこれ？」

ヒナギクは目の前の宇宙船に驚愕した。

すると扉が展開して中からメタルの生命体が出て来た。

（な、何この、メタルスラムみたいなの？）

ヒナギク曰く、メタルスラムみたいなのは、ヒナギクを見詰めた。

「一寸、何なのよあんた!？」

ヒナギクの怒鳴り声に近い問いに、メタルの生命体は驚いて飛び退いた。

（同じ言語？）

そう思った生命体は話し掛ける事にした。

「私はこの惑星を支配する為、惑星メタリックから来たメタリック星人だ」

「あなた一人で何が出来るのかしら？まあ仮に出来るとしても、そんなの私が許さないけどね」

目の前の生命体を敵と見なしたヒナギクは、そう言って正宗を召喚した。

「ほう。この私に戦いを挑むとは良い度胸。だが残念だったな。貴様は私には敵わない」

異星人がそう言った瞬間、ヒナギクの姿が消え、頭上に出現した。  
「はああ！」

ヒナギクが正宗を振るう。

ビシャッ！

メタルの生命体は攻撃を受けて液体になった。

（あら、随分呆気ないわね）

そう思った刹那、液体がヒナギク目掛けて跳び、体に張り付いて肉体の内側に染み込んでいく。

（か、体が動かない！？）

そして液体が完全に体内に入り込むと、ヒナギクは両手を前に出して握ったり開いたりを繰り返して北叟笑んだ。

（な、何なのよ？何で体が勝手に？）

体に乗っ取られてしまったヒナギク。

この後一体、どうなるのだろうか？

つづく

## S t o r y 1 ヤドリ（前書き）

次のネタが思い付かん。

## Story 1・ヤドリ

とある平日の朝。

生徒会室には三人娘の朝風<sup>あさかぜ</sup> 理沙、花菱<sup>はなびし</sup> 美希、瀬川<sup>せがわ</sup> 泉が居た。

「ヒナの奴、朝っぱらから一体何の用なんだろう？」と朝風。

「さあな」

「屹度、あの事がバレたんじゃない？」

三人は頭上にある光景を浮かべた。

それは、ヒナギクが大好きな男の子に貰った大事にしているティーカップを落として割り、専用の接着剤で元に戻した時のものである。

「おはよう、三人とも」

三人がイメージしていると、ヒナギクが現れて笑顔で挨拶してきた。

三人は驚いて背筋をピンツと張った。

「どうしたの？」

首を傾げるヒナギク。

「否、何でも無いんだ」

朝風の言葉に二人が頷く。

「それよりヒナ。こんな朝っぱらから私たちを呼び付けて一体何を企んでいるんだ？」

「うん？地球征服」

ヒナギクは表情崩さず答えた。

三人は「はあ？」と目を点にした。

（何だ今日のヒナ。何か変だ）

（ヒナ、頭でも打ったのか？）

（今日のヒナちゃん、可らしい）

三人はそれぞれそう思った。

「よく解ないけど、頑張ってね」

三人はそう残して去ろうとしたが、ヒナギクが制止する。

「待つて。あなたたちにも手伝って貰うわ」

「何を？」

「地球征服を」

「嫌だ」

「他当たってくれ」

「じゃあね」

三人はエレベーターに向かった。

その途端、突然エレベーターのボタンから白煙が吹いて壊れ、押しでも反応が起きなくなった。

「ただじゃ帰さないわよ」

その言葉に三人は振り向く。

「あなたたちには今から私のシモベになって貰うわ」

ヒナギクはそう言つて、蜥蜴とかげの様な生物を口から三匹吐き出した。「さあ行きなさい。私の可愛いシモベたち」

ヒナギクがそう言つと、三匹が同時に三人に飛び付き、体内に侵入した。

三人は両手を前に出して握つたり開いたりを繰り返した。

「三人とも、私を見なさい」

その言葉に三人はヒナギクを見ると、慌てて跪いた。

「「これはこれは、偉大なる宇宙の帝王アングル・モア様」」「顔を上げて」

三人は顔を上げた。

「あなたたち、今すぐ校内から戦闘能力の高い人間どもを集めて来て頂戴」

「お任せ下さい、モア様」

理沙はそう言つと、三人で戦闘能力の高い生徒たちを集めに行つた。

それと入れ替わりに、三千院家執事の綾崎あやざき 颯がやって来た。

「ヒナギクさん、僕に大事な話して何ですか？」

「待つてたわ。あなたに頼みたい事があるの」



「頼み事、ですか？」

「そう。これから私は地球を征服するわ。だから、あなたに手を貸して欲しいの」

「はい？」

ハヤテは訳が解らず首を傾げた。

「あの、大丈夫ですかヒナギクさん？」

「大丈夫よ。で、手伝ってくれるわよね？」

「嫌です。いくらヒナギクさんの頼みでもそれだけは出来ません」

「そう。それじゃあ仕方ないわね」

ヒナギクはそう言うのとハヤテに近付いた。

「本当はあなたにだけはこんな事したく無いけど、仕方ないわね」とヒナギクはハヤテの唇を奪った。

そして先程、三人の体内に入れたものと同じ蜥蜴っぽいを出してハヤテの口内に押し込み、それが体内に入ったのを確認して唇を離した。

「ちよつ、いきなり何するんですか！？て言うか今、口の中に何か入れましたよね！？」

ヒナギクはその言葉に飛び退いて構えた。

「一寸あんた、私に操られないってどう言う事！？」

ヒナギクはそう言うてハヤテを睨んだ。

（うわっ、何かヒナギクさんが怒ってる！此処は取り敢えず御機嫌を取らなくては！）

そう思ったハヤテは咄嗟に言葉を発した。

「これはこれは、偉大なる宇宙の帝王・・・」

そこまで言うてハヤテは考える。

（何て呼べば良いんだ？ヒナギク様。否・・・）

「モア様！」

呼び方が思い付かなかったハヤテは取り敢えずそう呼んだ。

「様なんて付けなくて良いわ」

「そうですか。ではモアさんで」

その言葉にヒナギクは微笑んだ。

「じゃあハヤテくん。あなたには私の警護をお願いするわ」

「お任せ下さい。ヒナギクさんに近付く者は誰であろうと容赦しません」

「ヒナギク？」

と顔を顰めるヒナギク。

「やっぱあんた操られてないじゃないのよ！」

（しまった！また怒らせてしまった。て言うか操る？）

「あの、一つ気になるんですが、操るって何ですか？」

ハヤテが訊ねると、ヒナギクは暫し考え込んで口を開いた。

「良いわ。教えてあげる」

そう言って口から例の蜥蜴っぽいのを吐き出した。

「何なんですか、それ？」

ハヤテは首を傾げる。

「これはヤドリって言って、私のシモベよ。この子を他の生物に乗り移らせて私の奴隷にするの。既に三人、奴隷にしてあるわ」

「あー、やっぱり疲れてるんですね。ここ最近、ヒナギクさん寝る間も惜しんで手紙の返事書いてましたし」

ハヤテがそう言っつと、ヒナギクの首がコクと曲がり、そこからメタルの生命体の頭が出て来た。

「・・・・・・」

その衝撃的な事態にハヤテは沈黙する。

（何なんですか、このメタルスラムみたいなの）

「私は惑星メタリックからこの星を征服しに来たアングル・モアだ」

「アングル・モア・・・って、あのノトラダスが予言した！？あれって外れた筈でしたけど！？」

「知らんな。兎に角、私に操られない者には消えて貰う」

モアはそう言っつと、頭をヒナギクの中に戻し、正宗を召喚した。

（な、何だこの戦わなきゃいけない感じの雰囲気は・・・）

とハヤテは取り敢えず構えた。

刹那、ヒナギクの姿が消え、頭上に現れた。

「うわっ！」

ハヤテは咄嗟に避け、バルコニーに飛び出した。

「はああ！」

と襲い掛かるヒナギク。

ハヤテは微動だにせず言った。

「此处、高い所ですよ？」

「え？」

ヒナギクはバルコニーの先にある絶景を見渡した。

「それがどうかしたのかしら？」

「えっ、高所恐怖症じゃないんですか！？」

「それはこの体じゃないかしら。私は高い所は平気よ」

（・・・此处は一旦退いて、作戦を立ててから来よう）

そう思ったハヤテは、バルコニーから地上に飛び下りた。

（此处はもう危険だ。屋敷に戻ろう）

ハヤテは白皇学院を離れ、屋敷に戻った。

## Story 2・虎鉄に惚れたハヤテ

白皇を抜け出したハヤテは屋敷に向かって走っていた。  
すると執事の虎鉄こてつが現れ声を掛けてきた。

「綾崎、そんなに急いで何処行く？」

しかしハヤテは止まる事なく「今はあなたに関わってる暇はありません！」と返答して通過していく。

「まあ待て」

虎鉄はそう言っただけでハヤテの腕を掴んで引き留めた。

「何するんですか？放して下さい」

「綾崎、私とデートをしてくれ」

「嫌ですよ。第一あなた男じゃないですか」

「そうか。なら致し方ない」

虎鉄はそう言っただけで懐から光線銃を取り出した。

（な、何か嫌な予感）

こう言う時、ハヤテの直感は当たる訳で・・・。

「お前を女に変えるまでだ」

虎鉄は光線銃をハヤテに向けトリガーを引いた。

するとハヤテの髪が見る見る内に背中まで伸びていき、胸が膨らんでいった。

「な、何なんですかこれ！？」

ハヤテは驚き、自分の体を改めた。

（うわっ、僕全身女の子に！）

「これは性転換光線銃と言っただけ、私が牧村まきむら志織に作らせた物だ。  
この光線を浴びた者は一瞬にして性別が変わってしまう」

「な、何の為にそんな事を？」

「決まってるじゃないか。君と付き合いたいからだ」

「はあ」

ハヤテは溜め息を吐いて肩を竦めた。

「いい加減にして下さい。キモイですよ、変態」

「何故だ綾崎？何故私では駄目なのだ？」

「あなたが男だからですよ」

「それはお前を女にした事で解決した」

その言葉にハヤテは沈黙した。

「しかしそれでも駄目と言うならこうするしかあるまい」

言つて虎鉄は光線銃を仕舞い、別の光線銃を取り出してハヤテに向けた。

「今度は何ですか？まさか、目の前に居る人に一目惚れさせる光線とか言っんじゃないでしょうね？」

「ご明察」

虎鉄はそう言つて光線銃を放つた。

途端、ハヤテの心臓の鼓動が早くなつた。

（そんな、本当に恋してしまうなんて）

「綾崎、私と付き合ってくれ」

（断ろう）

ハヤテはそう思うが、しかし、抗<sup>あらが</sup>う事が出来ず「はい」とつい返事をしてしまった。

（僕は何OKしてんだ！？）

「よし綾崎、初デートと行こうか」

「はい。けどその前にやりたい事があるんですけど」

「やりたい事？言ってみる。ものによっては手伝つてやるぞ」

ハヤテは先程、白皇で起きた事を虎鉄に伝えた。

「何っ、宇宙から地球を征服しようとしてる奴がやって来ただど！？」

うーむ　と虎鉄は唸り考え込む。

「よし、良いだろ。手伝つてやる」

「有り難う御座います、虎鉄さん」

虎鉄がパーティに加わつた。

「よし、それじゃあ早速、アングル・モアとやらを倒しに行こう」

虎鉄が言つと、二人は白皇の生徒会室に向かった。

### Story 3・白皇生徒奴隸化

「そこまでだ、アンゴル・モア！」

ハヤテと虎鉄は生徒会室に飛び込んだ。

「待ってたわ、ハヤテくん。って、ハヤテくんよね？」

ヒナギクは目を疑った。

「訳ありで今は女になってますが、僕はハヤテですよ？」

「ふーん。そっちの執事くんは？」

「虎鉄と申します」

虎鉄は律儀にもお辞儀をした。

「この人が僕をこんな姿にしました。これで」

ハヤテはそう言って虎鉄の懷から二つの光線銃を取り出した。

「お陰で僕は今、虎鉄さんの虜とらです」

「こら返せ！」

虎鉄はハヤテから光線銃を奪取して懷に戻した。

「ハヤテくん、男に戻りたいかしら？」

「出来れば戻りたいです」

「じゃあ戻してあげるわ」

ヒナギクはそう言って一瞬で虎鉄の懷に駆け、虎鉄の鳩尾に拳を埋めずめて気絶させ、懷から二つの光線銃を奪取し、ハヤテに向けて性転換光線を照射した。

するとハヤテの体が元に戻った。

ハヤテは呆氣に取られ口をポカーンと開けていた。

そんなハヤテにヒナギクは一目惚れ光線を照射した。

「ハヤテくん」

「え、あ、はい」

ハヤテは我を取り戻してヒナギクを見た。  
すると心臓がドキドキして来た。

「ハヤテくん、改めてお手伝い宜しくね」

ヒナギクはそう言ってウィンクをしてハートマークをハヤテに飛ばした。

そのハートマークはハヤテに当たり、彼の両目をハートマークに変える。

「イエッサー」

ハヤテはそう返事をした。

こうして、ハヤテはアングル・モア側に寝返った。

「さてハヤテくん。早速だけど、頼まれてくれないかしら？」

「何ですか？」

「そいつを片付けてきてくれる？」

「解りました、ヒナギクさん」

「モアよ」

「はい、モアさん」

ハヤテは虎鉄をバルコニーに引つ張り出し、そこから空に向かって思いつ切り蹴り飛ばした。

虎鉄はキリーンと輝いて遙か彼方へ飛んでいった。

「モアさん、他には何かありますか？」

「否、今は無いわ」

「そうですね。では、僕は教室に戻るの何か遭ったら呼び下さい。直ぐに助けに来ますよ」

「あら、随分と頼もしい下僕じゃない。じゃ、宜しくね」

「はい」

ハヤテは去っていく。

「あ、戻るついでに、職員室で牧村先生に此处へ来る様に伝えてくれる？」

「かしこまりました。伝えておきます」

ハヤテはそう残して去っていった。

ヒナギクは席に着き、＜地球征服計画＞と書かれたノートを開いた。

そこにはこう書かれていた。



桂 雛菊を乗っ取る。

綾崎 颯を夫にする。

地球人全員奴隷化。

この内、一番上にはチェックが付いている。

ヒナギクは二段目にチェックを入れてノートを閉じ、バルコニーに出て絶景を眺めた。

「もう直ぐ、この星も私の物ね」

と口にするヒナギク。

そこへ、牧村がやって来た。

「あの、桂さん。私に用って何ですか？」

ヒナギクは振り向き、牧村の前に移動した。

「待ってたわ、牧村先生」

座って下さい とヒナギクは牧村をソファに案内する。

「あの、牧村先生にお願いがあるんです」

「お願い、ですか？」

「はい。実は今、私は地球を征服しようとしているんです。そこで天才科学者のあなたの力をお借りしようと思うのですが、協力して頂けないでしょうか？」「駄目よ」

牧村は間髪を容れず拒否した。

「そんな事に私は力を貸さないわ」

「そうですか。では仕方ありませんね。あなたには奴隷になって貰います」

ヒナギクはそう言って口からヤドリを吐き出した。

「さあ行くのよ。私の可愛いシモベ」

ヒナギクがそう言うと、ヤドリは牧村に飛び掛かり、体内に侵入した。

「牧村、協力してくれるわね？」

訊ねると、牧村は跪いた。

「はっ、仰せのままに」

牧村はそう言うのと去っていった。

「ハヤテくーん！」

ヒナギクは叫んだ。

するとハヤテが現れた。

「何かご用でしょうか、モアさん」

「ヤドリたちを白皇内の人間に入れて来て」

ヒナギクはそう言って大きな袋を用意し、ヤドリをその中に沢山吐き出してハヤテに渡した。

「かしこまりました」

ハヤテは袋を持って生徒会室を跡にし、白皇中を回って生徒全員にヤドリを乗り移らせ、ヒナギクの下に戻った。

「終わりました、モアさん」

「ご苦労様。戻って良いわよ」

「はい」

ハヤテは去っていった。

## Story 4・減る奴隷

ヒナギクの地球征服計画が始まって一ヶ月。

練馬は既に、ヒナギクが征服していた。

彼女の一言で、下僕にされた練馬住民は簡単に動かせる。

そんな町にドーンツと佇む三千院家の屋敷。

そこには現在、ヒナギクとハヤテが二人だけで住んでいる。

屋敷の主人 三千院さんぜんいん 凧、メイドのマリア、執事長の倉臼くらうす 征

史郎はヒナギクのご命令により全財産を残して強制退去。住む家を失ってホームレス生活となっている。

それはそれとして、命令を下した当人は、ナギが使っていた自室のベッドで眠っていた。

「モアさん、朝ですよ」

そんな彼女を起こそうと、ハヤテが体を揺さ振った。

ヒナギクはそれに反応して目を開けた。

「おはよう、ハヤテくん」

と微笑んでみせる。

「はい、おはよう御座います」

ハヤテも同じ様に微笑んだ。

「お食事の用意が出来てますので食堂の方へ御足労お願いします」  
「解ったわ」

ヒナギクは起き上がり、ベッドから降りて食堂に向かった。

その後ろをハヤテが付いていく。

途中、ハヤテは気になっていた事を訊ねる。

「あの、モアさん」

「何かしら？」

「ずっと気になっていたんですけど、どうして僕だけ皆と扱いが違  
うんですか？」

「さあ、どうしてだと思う？」

その問いにハヤテは暫し考えるが、答えは出なかった。  
「解りません」

「そう。じゃあ教えてあげる。それは、あなたが」  
そう言い掛けた所でヒナギクの声が掻き消された。

「アンゴル・モア様ー！」

と慌てて駆けてくる桂かつら 雪路。

雪路はヒナギクの懷に辿り着くと、思いつ切り抱き付いた。

「こんな朝っぱらから一体どうしたのよ？」

「実はね」

雪路は夜中にお酒を飲みまくってお金が無くなった事を話した。

「　　と言う訳でお金を下さい」

「シモベの分際で金銭を要求するなんてとんだ不届き者ね、雪路は」  
「そんな事言わずに下さい。それでも私はあなた様の姉なんですよ」  
「？」

「ハヤテくん、追い返して頂戴」

「了解しました」

ハヤテは雪路をヒナギクからひっぺがした。

「ちよっ、放しなさいよ綾崎！」

「雪路、ハヤテくんを呼び捨てしないで頂戴」

「五月蠅いわね！ごちゃごちゃ言っでさっさとお金寄越す！」

ピキッ！

ヒナギクは額に青筋を立てた。

「私に齒向かうなんて良い度胸じゃない。どうして欲しい？」

「お金を寄越せ！」

どぐしっ！

ヒナギクは雪路に強力なキックをお見舞いした。

雪路はハヤテと共に吹っ飛んだ。

「ごめんハヤテくん！」

ヒナギクは慌てて駆け、先回りしてハヤテを抱き抱えた。

その横を雪路が吹っ飛んでいく、のは無視してハヤテが言う。

「否、構いませんよ別に」

ハヤテはヒナギクに苦笑いを見せた。

その時、生徒会三人娘が血相を変えてやって来た。

「モア様、大変です！」

ヒナギクはハヤテを放して三人に向く。

「どうしたの？」

「メタリック化した人間どもが何者かによって元に戻されてます！」

これがその映像です　と朝風が持っていたノート形パソコンを開き、映像を再生する。

そこには、操られた住民たちを霊能力で元に戻している鷺<sup>さぎ</sup>ノ宮<sup>のみや</sup>伊澄<sup>みや</sup>が映っていた。

「伊澄さんじゃないですか、これ」

映像を見たハヤテは咄嗟にそう言った。

「ハヤテくん、彼女を捕まえて来て頂戴」

「解りました！」

ハヤテはそう言って伊澄の下へ向かった。

## S t o r y 5 ・異世界からの来訪者（前書き）

今回を持ちましてこの物語は最終話です。

皆さん、短い間でしたが、読んで頂いて誠に有り難う御座います。  
では、本編をお楽しみ下さい。

## Story 5・異世界からの来訪者

「これではきりがないわ」

伊澄は大勢の操られた練馬住人と対峙していた。

「あ！」

伊澄が後ろを顧みて焦る。

360度、完全に包囲されていた。

「モア様に逆らう奴は生かしてはおけん！」

住民の一人がそう言くと、一斉に飛び掛かった。

もうダメ そう思った伊澄は「ハヤテ様！」と叫んだ。

すると、ハヤテが現れて伊澄を抱え、跳び上がって包囲網を抜け出し、屋敷へと向かった。

その道中、伊澄がハヤテに訊ねる。

「ハヤテ様、無事だったんですか？」

「何がですか？」とハヤテが問い返す。

「練馬の住民はモアとか言う訳の分からない者に操られています。ハヤテ様は操られていないんですか？」

その問いにハヤテが顔を曇らせ、直ぐに笑みを浮かべてみせる。

「僕は操られてませんよ。それに、もし操られていたら、伊澄さんの事は助けません、多分」

それを聞いた伊澄は、嬉しさのあまり涙を流してしまった。

「ちよつ、伊澄さん!？」

「すみません、嬉しかったものでつい。それはそうと、どちらに向かっていらつしやるのでしょうか？」

「屋敷ですよ」

「ダメです」

「え？」

「ナギのお屋敷ですよね?とても危険な気配を感じます。屹度、モアとか言う・・・っ!？」

伊澄がそう言い掛けた所で、ハヤテが彼女の首を掴んで頸動脈を絞めた。

「暫く眠ってて貰いますよ」

「ハヤテ・・・様・・・？」

伊澄はそう呟いて意識を失った。

目覚めると、伊澄は三千院家屋敷のナギの部屋に、椅子に座られ、ロープで縛られて固定され、口に猿轡さるくわを銜くわえさせられていた。

「あら、お目覚めの様ね」

とピンクの長髪に髪留めを着けた少女が言った。

猿轡さるくわをされていた伊澄は、彼女の頭に直接語り掛ける。

『せ、生徒会長さん？』

と言うのはヒナギクの事。彼女は頭に響いた声に一瞬驚き戸惑うが、しかし、直ぐに冷静さを取り戻した。

「驚いたわ。この地球ほしにもテレパシーを使える奴が居るなんて」  
そんな事より　と言葉を続ける。

「私の可愛いシモベたちを正気に戻したのはあなたね？」

『それじゃあ、あなたがモア？』

「よく判ったわね」

『生徒会長の体から出て行つて下さい』

「それは聞けない相談ね」

『そうですか。では、無理矢理にでも追い出させてさしあげます』

伊澄はそう伝えると、念じて縛っていたロープを粉微塵こなみじんにした。

「なっ!？」

ヒナギクが焦る。

「は、ハヤテくん！」

ヒナギクが叫ぶと、ハヤテがやって来た。

「お呼びですか、モアさん？」

「そいつを何とかするのよ！」



「解りました」

ハヤテは伊澄の方を向き、近付いて襲い掛かったが、しかし、伊澄にバリアを張られて弾き飛ばされた。

「うわっ！」

勢いよく吹っ飛んだハヤテは壁に叩き付けられた。

「がはっ！」

吐血と共にヤドリが飛び出した。

「なっ、ヤドリが！」

ヒナギクは慌てて口から新しいヤドリをハヤテに吐き飛ばした。しかし、既の所でかわされてしまう。

「もうそんな物、入れさせませんよ」

ハヤテはそう言ってヒナギクを睨み付ける。

「アングル・モア、ヒナギクさんから出て行って下さい」

「嫌よ」

「そうですか。では致し方ありません」

とハヤテは一瞬でヒナギクの懷に駆け、拳を鳩尾に埋めようとしたが、しかし、咄嗟にヒナギクがその拳を掴んだ。

「やめなさい。あなたの様な頑丈な人間なら平気だろうけど、この体は普通の人間の物。鳩尾なんか殴ったら死ぬわよ？」

「・・・！？」

ハヤテは頭上に感嘆符と疑問符を浮かべた。

（そんな、僕はヒナギクさんに何て事を！？）

脱力して床に膝を着くハヤテ。

「八葉六式、撃破滅却、1兆分の1」

と伊澄が隙を突いて攻撃した。

ドンッ！

小爆発が起きてヒナギクの背中にダメージが与えられる。

「うっ！」

ヒナギクは背中を押さえ怯んだ。

「ハヤテ様、これを！」

伊澄がそう言って木刀を召喚してハヤテに投げた。

ゴスッ！

ハヤテは木刀を取り損ない、木刀が額に直撃した。

「伊澄さん、物を投げるなって幼稚園で教わらなかったんですか！？」

「すみません、当たるとは思わなくて。それより、それを使って生徒会長さんの内側に居る者を出して下さい」

「出すってどうやって？」

「その木刀、妖刀カマイタチを目覚めさせるのです」

「よ、妖刀カマイタチ？」

「説明してる暇はありません。早くしないと逃げられます」

言って伊澄は部屋を出ようとしてるヒナギクを指差した。

「けど、目覚めさせるってどうやって？」

「判りません」

「はあ！？」

ハヤテは驚き素っ頓狂な声を上げた。

「取り敢えず、戦って少し弱らせて下さい。多分、何とかかります」

「多分？」

頷く伊澄。

「まあそれでヒナギクさんを奪還出来るのなら！」

とハヤテが木刀を拾って駆け、たった今ドアを開けたヒナギクに襲い掛かった。

「！？」

ヒナギクは咄嗟にかわして正宗を召喚した。

「正宗！」

と伊澄が叫ぶのは無視して、ヒナギクは迫るハヤテに正宗で応戦する。

カッ！

木刀と木刀が交じり合って音を立てる。

「なかなかやるわね」

両者は互いに飛び退き、再度近付いて攻撃する。

「うわっ！」

ハヤテが先に攻撃を受けて吹っ飛んだ。

その時、彼の頭に声が響いた。

『汝、<sup>なんじ</sup>我の名を呼ぶが良い』

（何だ、今のは？）

『我の名は、カマイタチ。汝を我を持つにふさわしい者と認めよう。さあ、我の名を呼ぶが良い』

（何だか分かりませんが、呼ぶしか無いみたいですね）

そう思ったハヤテは「カマイタチ！」と叫んだ。

すると木刀のカマイタチが光りに包まれ真剣に変化する。その姿は丸で、曝しの付いた出刃包丁。胸に孔の開いた悪霊と戦う主人公の死神が持つソレと同じ形だった。

「これってひよっとして斬 刀？」

「あの、ハヤテ様。その様な形で宜しいのでしょうか？」

「良いんじゃないですか？だってアニメでの主人公の妹がナギお嬢様とC.V.が一緒なので」

「隙あり！」

ヒナギクが隙を突いてハヤテに攻撃した。

「うっ！」

正宗が腹に埋まり呻き声を上げるハヤテ。

「ボーツとしてると死ぬわよ？」

「それも良いかも知れませんが。あなたに操られないで済むので」

「ふうん。じゃあお望み通り殺してあげるわ」

ヒナギクは飛び退き、正宗を振るって真空刃を放った。

真空の刃がハヤテを襲う。

ハヤテはもうダメかと思った。

その時、伊澄がおまじないを唱えた。

「異世界より最強の騎士よ、この世界に來たりてハヤテ様を守りたまえ！」

すると、ハヤテの前に光りが現れ、その中から木刀を持った水色長髪の少女が出現。光りが消えた。

少女は突然の事で戸惑っていたが、真空刃が迫っている事に気付くと、直ぐに木刀で弾き返した。

「何処だ、此処？」

と辺りを見回す少女。

「あー！」

少女は此処が何処であるかと言う事に気付くと叫んだ。

「ナギさんの部屋だ！しかし何故いきなりこんな所に？」

と少女は疑問符を頭に浮かべた。

「あなた、何者！？」

突然の事に驚いたヒナギクが少女に訊ねた。

「え？」

少女はヒナギクの方を向いた。

「お袋？」

と少女が首を傾げる。

ヒナギクは「は？」と目を丸くした。

「あの、君は一体？」

ハヤテがそう訊ねると、少女が振り向いた。

「パパ！」

少女はそう叫び、木刀を放してハヤテに抱き付いた。

「え、パパ？」

ハヤテは首を傾げた。

「久しぶりだね、パパ」

「あ、あの、君は誰？」

「えっ、パパ、私の事忘れちゃったの！？娘の心だよ！」

「知らないよ。て言うかそもそも僕に娘なんか居ないって」

自称ハヤテの娘　心はその言葉に驚いた。

「何言つてんだよパパ！パパは綾崎　颯でしょ！？私はその綾崎　颯の娘の心だよ！」

ハヤテは訳が分からず頭が真っ白になった。

「あの、あなたは一体？」

と伊澄が心に訊ねる。

「ん？」

心が伊澄に向く。

「えっと、夏澄？」

「いえ、伊澄です」

「何だ、伊澄さんか。そっくりだから間違え・・・って、ええ！？」  
心は驚いて飛び上がりそうになった。

「そんじゃあ此処は過去！？」

「否、多分、あなたから見れば異世界かと」

「異世界？」

「はい。あなたの事は、私が異世界から召喚しました」

「何か男の子が女の子の使い魔になるアレみたいだな」

「ヤマグチノボルが描いたアレですか？」

とハヤテ。

「そうそう、それぞれ！つか、話し変わるけど、二人は何で戦つてんの？」

「ああ、それは」

とハヤテが心にアングル・モアの事を話した。

「成程。お袋の体からそいつを追いつせば良いんだな？任せとけ」  
心はそう言つて自分の胸を叩くと、ヒナギクの方を向いた。

「正宗！」

そう叫び、手放した正宗を引き寄せて装備し、ヒナギクの背後に回り込んだ。

「はっ！」

と心が野球の打球フォームで正宗と呼ばれる木刀でヒナギクの腰を叩き、透過させて体内のアングル・モアを追いつ出した。

同時にヒナギクの体が倒れた。

「ヒナギクさん！」

とハヤテが駆け寄る。

「うん・・・ん・・・？」

ヒナギクは意識を取り戻し薄目を開けた。

「ハヤテくん？」

と目を擦って確認するヒナギク。

「ハヤテくん、私は今まで何をしてたの？」

その問いにハヤテはアングル・モアを指差した。

するとヒナギクは、アングル・モアと激戦を繰り広げている心を見た。

「そっか。私、乗っ取られてたんだっけ。てかあの戦ってる娘は？」

「伊澄さんが異世界から召喚したそうです」

「異世界って、そんなのがあるの？」

「さあ」

とハヤテは可哀想な者を見る様な目で訊ねたヒナギクに対して肩を竦めてみせる。

その傍らでは、心がアングル・モアと激戦を続けている。

互いに殴り合い、蹴り合い。丸でドラゴンボールの戦闘シーンを  
見ているかの様だ。

（クソッ、強い！）

心は距離を取り、正宗を持ち構えた。

「貴様と格闘しても埒があかねえ。こいつで終わりにしてやる！」

心はそう言くと、傍らに落ちていた妖刀カマイタチを拾って口に  
銜え、ヒナギクの下に落ちていた正宗を引き寄せて空いている手で  
握った。

心はカマイタチを銜えたまま、

「三刀流、カマイタチスラッシュ！」

と叫んで駆け、三本の刀を振るい、アングル・モアの背後へ抜けた。

するとアングル・モアの体がバラバラになって八方に飛び散った。  
同時に、操られていた練馬住民の体から、ヤドリの死骸が抜け落

ちたとかないとか。

「おのれ、よくも殺ってくれたな！」

その声と共に、アングル・モアの破片が一点に集まり出して一つになり、元の形に戻った。

「こうなつたら貴様に移つてやる！」

アングル・モアがそう言つて心に跳び掛かると、彼女が言った。

「お前はもう、死んでいる」

「え？」

とアングル・モアが疑問符を浮かべた刹那、アングル・モアは爆裂霧散。爆風が発生し、ハヤテ、ヒナギク、伊澄は吹っ飛ばされて壁にぶつかった。

「うわっ！」

「キヤッ！」

「痛いです」

と三人は壁からずり落ちて床に倒れた。が、ヒナギクが直ぐに立ち上がり、心に近付いた。

「一寸あなた」

「何だ？」

と銜えていたカマイタチを口から離して振り向く心。

「何だ、じゃないわ。危ないじゃない！死んだらどうしてくれるのよ！？」

ヒナギクはそう怒鳴りながら睨んだ。

「ごめん。あんなに強風だとは思わなくて」

ヒナギクは「はあ」と溜め息を吐いて肩を竦めた。

「まあ良いわ。三人とも無事だから。それはそうと、あなた私にそっくりね」

「そっくりなのは当然だよ。だって私、綾崎 颯と桂 雛菊の長女だから」

「・・・え？」

ハヤテとヒナギクは目を点にした。

どう言う事？ と訊ねる二人。

「つまりこう言う事ではないでしょうか」

と伊澄が口を開き、二人が彼女の方を向いた。

「心さんの居た世界では、お二人が心さんの両親なのではないでしょうか」

ですよね？ と顔を心に向ける伊澄。

心は素直に頷いた。

「私とハヤテくんが！？」

ヒナギクはハヤテの顔を見ると顔を真っ赤に染めた。

「・・・？」

ハヤテはそんなヒナギクを見て頭上に疑問符を浮かべた。

「所で伊澄さん」

「はい、何でしょう？」

「私は元の世界に帰れるの？」

その問いに伊澄はソッポを向いた。方法が無いらしい。

「どうなの？」

「・・・さあ？」

と肩を竦める伊澄。

「さあ、じゃねえよ！帰れなきゃ困んだよ！」

「そんな事言われなくても、還す方法が判りません。すみませんけど、判るまでこの世界に居て下さい」

「そんな・・・」

心はその場に崩れて膝を床に着いた。



## S t o r y 5 ・異世界からの来訪者（後書き）

この続きはヒナアフターでやります。そちらでお楽しみ下さい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8275d/>

---

ハヤテのごとく！ヒナギクが宇宙人!?やっつけ地球征服！

2010年10月8日10時38分発行